新古今和歌集

上之一

内閣文庫
和書 類
特別 號 三二二九五
冊 五六
架 九二函

内閣文庫
番號	和 32295	
冊數	56(13)	
函號	93甲	1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

新古今和歌集序

夫和歌者群徳之祖百福之宗也玄象天成五際六情之義未著素鵞地静三十一字之詠甫興爾来源流寔繁長短雖異或抒下情而達聞或宣上徳而致化或属遊宴而書懐或採艶色而寄言誠是理世撫民之鴻徽賞心楽事之亀鑑者也是以歴代明時集而録之各窮精微何以漏脱然猶崑嶺之玉採之有余鄧林之材伐之無尽物既如此歌亦宜然仍詔参議右衛

門督源朝臣通具大藏卿藤原朝臣有家
左近衛權中將藤原朝臣定家前上総介
藤原朝臣家隆左近衛權少將藤原朝臣
雅經等不擇貴賤高下令撰錦句玉章神
明之詞佛陀之作為表希夷雜而不雖婚
詠異萬近于當時彼此縱編各得呈進每
至玄圃花芳之朝璟砌色涼之夕辞翁波
浦之老遠流島涉系山之芳躅或以或詠撰
擧衆之才角無黨無偏撰翡翠之羽毛載
琢而記二千首數衆而為二十巻名曰新

古今和歌集矣時令節物之篇序四序而
星羅銀花雜詠之什並離別而而為綜緝
之致蓋云備矣以往來自代郎而識
元子之佐翊於潛宮而追諮詢之遊
今上陛下之叡覽也雖無隙帝道之諮詢
日域　朝廷之本也奈不賞歎哉之習
俟方今芝寧宮躰萬年詠作化之象萬
壽之日點之芝慕朧之宴之翠千秋之津
海之黑惟靜謐無為為藏之時可彫染
毫操擬之志旅撰部一集永欲傳至壬彼

上古之萬葉集者蓋和歌之源也編次
之起自唯々縁星霜稚鷁鶚雖披延喜
於古今集四人含綸命而奉之已来有後
撰集五人奉綸言而成之其後有拾遺後
拾遺金葉詞花千載等集皆出於
聖主歷代之勅雖恨為撰者一流之家因
茲訪延喜天暦二聖之遺美定洛河浩思
正聲之莫豪排神仙之居展列修之稽而
已新集之為躰也先抽萬葉集之中要指
七代集之分深索而微長無遺廣求而作
莫逐舉也雖張網於山野漁禽自逃雖遂
筆於江湖小鮮脩漏誅恭視雖之不足定
有篇章稽古今只隨採其所勤後也於
於古今者不載前代之　御製自後撰而
初加焉然々已專名者一部不滿十篇而
今所入之集須已雖三十首六家當持兼
一家餘可足法無通之總妙最有露詞
之易加備以脱落之思不顧多攜之眼凡
厭夜拾者嘉尚之錦繡運沖襟伏羲基皇
統而四千萬年異域年雖觀　　聖造之書

史乎　神武開錦功而八十二代帝紀未
雖　叡筆之撰集矣宜然也示之者人士
廿延歌新藻之遇逢矣不穩記仙洞無何
之鄉多嘆之曉月之無亦為呈寄愚元久
之篆有湿故出斯之心纔撰之趣不在茲
乎干時曆乙丑仲春三月云尔

やまとうたは、むかしあめつちひらけはじめて
人のしわざいまださだまらざりし時、葦原
中津国の言の葉として、稲田姫素鵞の里
よりぞつたはれりける。しかありしよりこのかた
その道さかりにおこり、その流いまにたゆ
ることなくして、色にふけり、心をのぶるなかだ
ちとし、世をおさめ、民をやはらぐる道とせり。
かかりければ、代々のみかどもこれをすてたまはず
えらびをかれたる集ども、家々のもてあそび物と
して、ことの葉の花のこれる木のもとかたく見れ

りひのおこりはるかなれともあつへしとも
いふとも伊勢の海きよきなきさの玉はひろ
ふともつくることなくいつみのそましけきみや
木はひくともたゆへからすものみなかくのことし
哥のみちまたおなしかるへしこれによりて右衛門
督源朝臣通具大蔵卿藤原朝臣有家左
近中将藤原朝臣定家前上総介藤原朝臣
家隆左近少将藤原朝臣雅経らにおほせて
むかし今の時をわかたすたかきいやしき人を
きらはすめにみえぬ神仏のことのはも
烏羽玉の夢につたへたる事まてひろくもとめあまねく集
めしむをのをのえらひたてまつれるところ
夏引のいとの一すちならすゆふへの雲のおもひさた
めかたきゆへにみとりのほらはなかうはしきあした
玉のみきり風すゝしきゆふへなにはつのなかれ
をくみてすみにこれるをさためあさか山のあとを
たつねてふかきあさきをわかてり万葉集
にいれる哥はこれをのそかす古今よりこのかた
七代の集にいれる哥をはこれをのせす
たゝしことはのそのにあそひ筆の海

とくこそ元にしるゝはことかれはのにまとむしを
の行りとのれさるゝひ昔よりさまわりされ
いつよも京に行ると云みちを見てありけら
ず云てさちくさくさまの者に行首く新古今和歌
集といふ集の中すとるたの山はちりと秋と見よ
より募ゑに流をまこひよの神すひのならくされ秋
ハ風よちらるさされ紅葉冬ハ白妙のうすハ雪
うまま雪流の他年も若まてこれ折りに流れ
多の分さけなる色と云ての三ちもたうま風よ
云ほことのすえて民の時とこりも清の流れ

ものまいくふよろうへ三人の世とさとりまむとこれ
みちれへよりれと云ひわけはりひかのなうち
まこやことれのひたうまの山乃雲井にまれられ
人とおひありる橋のあるにくろねる若と打こ
てもいふうちようこちまてとけかつよあるえわきとと
いろすわしいかむやすまこよ神いかされこ
のもと代家ふとのこ傳教大師ハ我あろたまの
あひとの人流へりかくれよれ云つねむりれ人乃
あるわさまありしゆきて見れ行ひのひらあ
まりとてと云ほいまこみ見ちらせしちもく覚

しそいつさひゆかはつましきと難くありけれは
つきの後よそふかゝり今やむかしの治君とのう
までもこやの山のすそ野は志かたりと思ひしも
亀てこそおこなひのみちを海あり給ひし後はまれ
つしてしたゝもおしちかひりとやともきとしてあ覧
のこてこそけさことまさきのかへるのいかふへくまもう
よりたれしこるへの民かもふるく草木なひかね
かきおくもれ海あふれはまの月志けらふすと
て和歌の浦なあふはれはる愛波の花をそ
あらはしつくし集とえらひてなつれ世よはさ亀

むかしなりかの万葉集と云はならの御かとの時
よりはしまりて其後はたゝ人のしる事なかりし
延喜のひしりの御代に四人に勅して古今集
をえらはしめ天暦のかしこき御代に五人におほせ
ありて後撰集をえらはしめ給ひそのゝち拾遺
後拾遺金葉詞華千載なとの集とみな一人
あれをうけたまはりて撰しもしえらはれたまへ
されはこのみちをもしるへきまてに古今後撰の両集をと
あまたのたからの人のもかなとはさこめてたてまつりしてより
ゆるしむかしなりそのうへのかなへるはさえんていふる

みつからさためてつからみかけることはとをくもろこしのふみのみちを
たつぬれははまちとりあとありといへともわか国やまと
ことのははしまりてのちくれ竹の世ゝにかゝる
ためしなむなかりける このうちみつからの哥を
のせたることふるきたくひはあれと十首にはすきさ
るへし しかるを今かれこれえらへるところ三十
首にあまれり これみな人のめたつへき色も
なくこゝろとゝむへきふしもありかたきゆへに
かへりていつれとわきかたけれは森のくちは
かすつもりみきはのもくつかきすてすなりぬることは

みちにふけるおもひふかくしてのちのあさけりをか
へりみさるなるへし 時に元久二年三月廿六
日なむしるしをはりぬる めをいやしみみゝをたふとふ
るあまりいそのかみふるきあとをはちぬといへとも
なかれをくみてみなもとをたつぬるゆへにとみの
を川のたえせぬみちをおこしつれは露霜は
あらたまるとも松ふく風のちりうせす春秋は
めくるともそらゆく月のくもりなくしてこの時にあへ
らむものはこれをよろこひこのみちをあふか
むものはいまをしのはさらめかも

国立公文書館
National Archives of Japan

新古今和歌集巻第一

春哥上

春たつこゝろをよみ侍りける　　摂政太政大臣

みよし野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり

太上天皇

ほのぼのと春こそ空にきにけらし天のかぐ山霞たなびく

百首哥たてまつりし時春のうた　　式子内親王

山ふかみ春ともしらぬ松の戸にたえだえかゝる雪の玉水

五十首哥たてまつりし時　　宮内卿

かきくらし猶ふる里の雪の中にあとこそ見えね春はきにけり

入道前関白太政大臣右大臣に侍りける時百首哥よませ侍りけるに立春の心を

皇太后宮大夫俊成

けふといへばもろこしまでも行春を都にのみと思ひけるかな

題しらず　　俊恵法師

春といへば霞みにけりな昨日まで浪まに見えしあはぢ嶋山

岩間とぢし氷もけさハ解そめて苔乃下水みちもとむ覧

西行法師

風まぜに雪ハ降つゝしかすがに霞たなびく春ハ来にけり

よみ人しらず

時ハ今ハ春になりぬとみ雪ふる遠き山べに霞たなびく

堀河院御時百首歌たてまつりけるにのこりの雪乃心をよみ侍ける

権中納言国信

春日野乃下もえわたる草乃上につれなくみゆる春のあは雪

題しらず

山辺赤人

あすからハ若菜つまむとしめし野に昨日もけふも雪ハ降つゝ

天暦御時屏風歌　壬生忠見

春日野乃草ハ緑になりにけり若菜つまむと誰かしめけむ

崇徳院に百首歌たてまつりける時春歌

前参議教長

若菜つむ袖とぞみゆる春日野乃飛火乃野べの雪乃村消

延喜御時乃屏風に

紀貫之

ゆきて見ぬ人もしのべと春乃野乃かたみにつめる若菜なりけり

述懐百首歌よみ侍ける若菜

皇太后宮大夫俊成

澤におふる若菜ならねといたつらに年をつむにも袖はぬれけり

日吉社によみてたてまつりける子日乃うた

さゝ浪や志賀の浜松ふりにけりたか世にひける子日なるらん

百首哥たてまつりし時

藤原家隆朝臣

谷川乃うち出る浪も声たてつ鶯さそへ春乃山風

和哥所にて関路鶯といふ事を

太上天皇

うくひすのなけともいまたふる雪に杉乃葉白き逢坂乃山

堀河院に百首哥たてまつりける時残雪乃心をよみ侍ける

藤原仲實朝臣

春きては花とも見よとかたをかの松のうは葉にあは雪
そふる

中納言家持

巻向乃檜原乃いまたくもらねは小松か原にあは雪そふる

よみ人しらす

いま更に雪ふらめやもかけろふのもゆる春日と成にし物を

凡河内躬恒

いつれをか花とはわかむふるさとの春日乃原にまたきえぬ雪

家乃百首哥合に余寒乃心を

摂政太政大臣

空はなをかすみもやらす風さえて雪けにくもる春の夜の月

和歌所にて春山月といふ心をよめる

越前

山ふかみなをかけさむし春の月空かきくもり雪はふりつゝ

詩をつくらせて哥にあはせ侍しに水郷春望と
いふことを

左衛門督通光

みしま江や霜もまたひぬあしの葉につのくむほとの春風そ吹

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江のあしのわか葉をこゆる白浪

春哥とて

西行法師

ふりつみし高ねのみ雪とけにけり清滝川の水のしら浪

源重之

梅かえにものうきほとにちる雪を花ともいはし春のなたてに

山辺赤人

あつさ弓はる山ちかく家ゐしてたえすきゝつる鶯のこゑ

よみ人しらす

梅か枝になきてうつろふ鶯のはね白妙にあは雪そふる

百首哥たてまつりし時

惟明親王

霞乃かゝれはらくも花をはくあかさかれや春を知らん
延しらん

志貴皇子

岩そゝくたるみのうへのさわらひのもえいつる春になりにけるかも

百首歌たてまつりし時

前大僧正慈円

わきて見ん峰乃桜は春のかた霧にかひくわけはかれぬる

崇徳院に百首歌たてまつりける時

藤原清輔朝臣

朝霞ふかくみゆるや煙たつ室の八しまのわたりなるらん

晩霞といふことをよみ侍

後徳大寺左大臣

なこ乃海乃霞乃まよりなかむれは入日をあらふ沖つしら浪

おのことも詩をつくりてうたにあはせ侍しに
水郷春望といふことを

太上天皇

見わたせは山もとかすむ水無瀬川夕は秋となにおもひけん

摂政太政大臣家百首歌合に春曙といふ心を
よみ侍ける

藤原家隆朝臣

霞たつ末乃松山ほのほのと浪にはなるゝよこ雲の空

守覚法親王五十首歌よませ侍けるに

藤原定家朝臣

春乃夜乃夢乃うき橋とたえして峯にわかるゝよこ雲乃空

きゝなれて梅乃花さかりに侍りけるをわきまへらるゝと

侍りける

中務

志るらめや霞乃空をなかめつゝ花もにほはぬ春をなけくと

守覚法親王家五十首歌に

藤原定家朝臣

大空ハ梅乃匂ひにかすミつゝくもりもはてぬ春の夜の月

題しらす

宇治前関白太政大臣

をられけり紅にほふ梅乃花けさ白妙に雪ハふれゝと

かきねの梅をよみ侍りける

藤原敦家朝臣

あるしをは誰ともわかす春ハたゝ垣ねの梅をたつねてそみる

梅花遠薫といふ事をよみ侍りける

源俊頼朝臣

心あらはとはましものを梅か香にたか里よりか匂ひきつらむ

百首哥たてまつりし時

藤原定家朝臣

梅花にほひをうつす袖のうへに軒もる月の影そあらそふ

藤原家隆朝臣

梅か香をむかしとおもひて春の月こよひぬれ袖にうつりまさる

千五百番哥合に　右衛門督通具

梅花たか袖ふれしにほひそと春やむかしの月にとはゝや

皇太后宮大夫俊成女

梅の花あかぬ色香もむかしにておなしかたみの春の夜の月

梅花をよみて大弐三位につかはしける

權中納言定頼

又イ
こぬ人によそへてみつる梅の花ちりなん後のなくさめそなき

返し

大弐三位

春ことに心をしむる花の枝にたかなほさりの袖かふれつる

二月雪落衣といふことをよみ侍ける

康資王母

梅ちらす風も越てや吹つらむかほれる雪の袖にみたるゝ

題しらす

西行法師

同イ
とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人はおりにこそよれ

百首哥よませ給ける時春の哥

式子内親王

なかめつる今日はむかしになりぬとも軒はの梅は我をわするな

土御門内大臣家に梅香留袖といふことをよみ侍けるに

藤原有家朝臣

ちりぬれは

ちりぬれは匂ひはかりを梅の花ありとや袖に春風の吹

題しらす　八条院高倉

獨のみなかめてちりぬ梅の花しるはかりなる人はとひこて

文集嘉陵春夜詩不明不暗朧々月といふ

ことをよみ侍る　大江千里

てりもせすくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物そなき

祐子内親王藤壺にすみ侍りけるに女房上人なと

さるへきかきり物語して春秋のあはれいつれに

か心ひくなとあらそひ侍りけるに人々おほく

秋に心をよせ侍りけれは

淺緑花もひとつにかすみつゝおほろにみゆる春の夜の月

菅原孝標女

百首哥たてまつりし時

難波かたかすまぬ浪も霞けりうつるもくもる朧月夜に

源具親

摂政太政大臣家百首哥合に

寂蓮法師

今はとてたのむの鴈もうちわひぬ朧月夜のあけほのゝ空

刑部卿頼輔哥合し侍りけるによみてつか

はしける

皇太后宮大夫俊成

きく人そ涙はおつる帰鴈なきて行なるあけほの乃空

題しらす　よみ人しらす

ふるさとに帰る鴈かね○さ夜更て雲ちにまよふ声聞ゆ也

海鴈を　摂政太政大臣

わすれなよたのむのさはをたつ鴈も稲葉の風の秋の夕暮

百首哥よませ給ひし時

かへる鴈今はの心ありあけに月と花との名こそ惜けれ

守覚法親王乃五十首哥に

藤原定家朝臣

霜まよふ空にしほれし鴈かね○のかへるつはさに春雨そ降る

閑中春雨といふ事を

大僧正行慶

つくつくと春のなかめのさひしきはしのふにつたふ軒の玉水

寛平御時后宮の哥合哥

伊勢

水の面にあやをりみたる春雨や山の緑をなへて染らん

百首哥たてまつりし時

摂政太政大臣

常盤なる山乃岩ね○にむす苔の染ぬみとりに春雨そふる

清輔朝臣乃許にて雨中苗代といふことをよみ侍る

勝命法師

雨ふれはをたのますらをいとまあれや苗代水を空にまかせて

延喜御時屏風に　凡河内躬恒

春雨のふりそめしより青柳のいとのみとりそ色まさりける

題しらす　大宰大弐高遠

うちなひき春はきにけり青柳のかけふむ道に人のやすらふ

輔仁親王

みよし野のおほかはのへの古柳かけこそみえね春めきにけり

百首歌中に　崇徳院御製

嵐ふく岸の柳のいなむしろおりしく浪にまかせてそみる

建仁元年三月歌合に霞隔遠樹といふことを

権中納言公経

たかせさすむつたのよとの柳原みとりもふかくかすむ春かな

百首歌よみ侍りける時春の歌とてよめる

殷富門院大輔

春風のかすみ吹とくたえまよりみたれてなひく青柳の糸

千五百番歌合に

藤原雅経

しら雲のたえまになひく青柳のかつらき山に春風そ吹

藤原有家朝臣

高柳[illegible]白露のきえつゝ世の春の色ならん

宮内卿

うすくこき野への緑の若草に跡まてみゆる雪のむらきえ

題しらす　　曽禰好忠

あら小田の去年のふる跡のふる蓬今は春へとひこはえにけり

壬生忠見

やかすとも草はもえなん春日野をたゝ春の日にまかせたらなん

西行法師

吉野山桜か枝に雪ちりて花おそけなる年にもあるかな

白河院鳥羽におはしましける時人々山家待花といへる心をよみ侍りける　　藤原隆時朝臣

桜花さかはまつみんとおもふまに日かすへにけり春の山里

亭子院歌合歌　　紀貫之

我心春の山へにあくかれてなかなかし日をけふもくらしつ

摂政太政大臣家百首歌合に野遊の心を　　藤原家隆朝臣

思ふとちそこともしらす行くれぬ花の宿かせ野への鶯

百首歌たてまつりし時

式子内親王

いま桜さきぬとみえてうすくもり春にかすめる世のけしきかな

題しらず　　よみ人しらず

[illegible]して思ひはたえてなかりけむ春毎に花のしたひもとくらん

中納言家持

ゆかむ人こむ人しのへ春霞たつたの山のはつさくら花

西行法師

吉野山こそのしほりの道かへてまたみぬかたの花をたつねん

和歌所にて歌つかうまつりしに春哥とてよめる

寂蓮法師

かつらきやたかまの桜さきにけりたつたのおくにかゝる白雲

題しらず　　よみ人しらず

いそのかみふるき都をきてみれは昔かさしゝ花咲にけり

源公忠朝臣

春にのみ年はあらなん荒小田をかへす〳〵も花をみるへく

やへさくらを折て人のつかはして侍けれは

道命法師

しら雲のたつたの山の八重桜いつれを花とわきておりけん

百首哥たてまつりし時

藤原定家朝臣

白雲の春ハかさねて立田山をくらの峯に花にほふらし

題しらず　　藤原家衡朝臣

芳野山花やさかりに匂ふらんふるさとさえぬ嶺の志ら雪

和歌所歌合に羇旅花といふ事を

藤原雅経

岩根ふミかさなる山をわけすてゝ花もいくへの跡の志ら雲

五十首哥たてまつりし時

尋ねきて花にくらせる木の間より待としもなき山の端の月

故郷花といへるこゝろを

前大僧正慈圓

散ちらず人もたづねぬ故郷の露けき花に春風そ吹

千五百番哥合に

右衛門督通具

いその神ふるの野の桜誰うへて春ハ忘れぬかたミなるらん

正三位季能

花そミる道の芝草ふミわけてよしのゝ宮の春の曙

藤原有家朝臣

朝日かけにほへる山の桜花つれなくきえぬ雪かとそミる

新古今和歌集巻第二

春歌下

釈阿和歌所にて九十賀し侍りし折屏風に
よ山に桜咲たる所を
太上天皇

桜咲とを山鳥のしたり尾のなかなかし日もあかぬ色かな

千五百番歌合に春歌
皇太后宮大夫俊成

いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみよしのゝ花

百首歌に
式子内親王

はかなくて過にしかたをかそふれは花に物思ふ春そへにける

内大臣に侍ける時望山花といへる心を
よみ侍ける
京極前関白太政大臣

白雲のたなひく山の八重桜いつれを花と行て折まし

祐子内親王家にて人々花の歌よみ侍けるに
権大納言長家

花の色にあまきる霞たちまよひ空さへ匂ふ山さくらかな

題しらす
山辺赤人

百敷の大宮人はいとまあれや桜かさしてけふもくらしつ

在原業平朝臣

花よりもみな顔ハちるとせし春も風のふく峰よりハ道

いもやすくねられさりけり春乃夜ハ花乃ちるのミ夢に見えつゝ

凡河内躬恒

山桜散てみ雪にまかひなハいつれか花と春にとはなん

伊勢

我宿乃物なりなから桜花ちるをハえこそとゝめさりけれ

貫之

寛平御時后宮歌合に

よみ人しらす

霞たつ春乃山へにさくら花あかすちるとや鶯のなく

題しらす

赤人

春雨ハいたくなふりそ桜花またみぬ人にちらまくもおし

花乃香に衣ハふかく成にけり木乃下かけ乃風のまに／＼

貫之

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

風かよふねさめ乃袖の花乃香にかほる枕の春の夜の夢

守覚法親王五十首哥よませ侍ける時

藤原家隆朝臣

この程ハしるもしらぬも玉ほこの行かふ袖ハ花のかそする

摂政太政大臣家に五首哥よみ侍けるに

皇太后宮大夫俊成

又やみんかたのゝみのゝ桜かり花の雪ちる春のあけほの

花の哥よみ侍けるに　祝部成仲

ちりちらすおほつかなきは春霞たなひく山の桜なりけり

山里にまかりてよみ侍ける　能因法師

山さと(寺イ)の春の夕くれきてみれはいりあひのかねに花そちりける

題しらす　恵慶法師

桜ちる春の山邊はうかりけり世をのかれにとこしかひもなく

花見侍ける人にさそはれてよみ侍ける

康資王母

山桜花の下風吹にけり木の本ことの雪のむらきえ

題しらす　源重之

春雨のそほふる空のをやみせすおつる涙に花そちりける

鴈かねのかへる羽風やさそふらん過行峰の花ものこらぬ

百首歌めしし時春の哥　源具親

時しもあれたのむの鴈のわかれさへ花ちる比のみよしのゝ里

見山花といへることを

大納言經信

山ふかみ杉乃むらたちみえぬまておのへの風に花乃散かな

堀川院御時百首歌たてまつりけるに花歌

大納言師頼

木下乃苔の緑もみえぬまて八重ちりしける山桜かな

花十首歌よみ侍けるに

左京大夫顕輔

ふもとまて尾上の桜ちりこすはたなひく雲とみてや過まし

花落客稀といふ事を

刑部卿範兼

花ちれはとふ人まれに成はてゝいとひし風の音のみそする

題しらす

西行法師

なかむとて花にもいたくなれぬれは散わかれこそ悲しかりけれ

越前

山里乃庭よりほかのみちもかな花ちりぬやと人もこそとへ

五十首歌たてまつりし中に湖上花を

宮内卿

花さそふひらの山風吹にけりこき行舟の跡みゆるまて

関路花を

あふ坂やこすゑの花を吹からに嵐そかすむ関の杉むら

百首歌たてまつりし時

二條院讃岐

山たかみ峯の嵐にちる花の月にあまきる明かたの空

百首哥めしける時の春哥

崇徳院御哥

山たかみ岩根の桜ちる時はあまの羽衣なつるとそみる

春日社哥合とて人々に歌よみ侍けるに

刑部卿頼輔

ちりまかふ花のよそめハ吉野山嵐にさはく峯の白雲

最勝四天王院障子に吉野山かきたる所

太上天皇

みよし野のたかねの桜ちりにけり嵐もしろき春のあけほの

千五百番哥合に　藤原定家朝臣

桜色の庭の春風あともなしとはゝそ人の雪とたにみん

ひとゝせしのひて大内の花見にまかりて侍しに

庭にちりて侍し花をすゝりのふたに入て摂政

のもとにつかはし侍し

太上天皇

けふたにも庭をさかりとうつる花きえすハありとも雪かともみよ

返し

摂政太政大臣

さそはれぬ人のためとやのこりけんあすよりさきの花の白雪

家乃庭へ桜をうへて雅明親王乃許に遣はし
ける　　式子内親王

八重匂ふ軒端乃桜うつろひぬ風よりさきにとふ人もかな

返し　　雅明親王

行かぬ身はうつろふ年そやへ桜とくもいそてもいろなかはる

又十首哥よみてまつりし時

藤原家隆朝臣

桜花うつろふ春をあまたへて身さへふりぬる浅茅生の宿

題しらす　　皇太后宮大夫俊成女

恨ミすやうき世を花乃いとひつゝさそふ風あらはと思ひけるをは

後徳大寺左大臣

はかなさをほかにもいはし桜花さきてはちりぬあはれ世中

入道前関白太政大臣家よ百首哥よませ侍りけ
る時　　俊恵法師

なかむへきのこりの春をかそふれは花とともにもちる涙かな

花歌とてよめる　　殷富門院大輔

花もまたわかれん春は思ひ出よさきちるたひの心つくしを

千五百番哥合よ　　左近中将良平

ちる花の忘かたみの峯乃雲そをたにのこせ春乃山風

落花といふ事を　　藤原雅経

花ゆゑ梅かこゝろを雪に吹ませてしはしは春の山風

題しらす　後白河院御哥

おしめとも散はてぬれは桜花今は木末をなかむはかりそ

残春の心を　摂政太政大臣

吉野山花のふるさとあとたえてむなしき枝に春風そふく

題しらす　大納言経信

ふるさとの花のさかりはすきぬれとおもかけさらぬ春の空かな

百首哥中に　式子内親王

花はちりその色となくなかむれはむなしき空に春雨そふる

小野宮のおほきおほいまうちきみ月輪寺に

花見侍りける日よめる

清原元輔

たかためかあすはのこさん山桜こほれてにほへけふのかたみに

曲水宴をよめる　中納言家持

からひとの舟をうかへてあそふてふけふそ我せこ花かつらせよ

紀貫之曲水宴し侍りける時月入花灘暗といふ

事をよみ侍りける

坂上是則

花なかす瀬をもみるへき三日月のわれて入ぬる山の遠方

雲林院の桜見にまかりけるにみなちりはてゝ

く川のふかき枝よのこゝろそ侍りける

良暹法師

霞流るゝ風もおもはぬにたえぬる波の色とも見えてちるらん

千五百番歌合に

寂蓮法師

思ひたつ鳥ハふるすもたのむらんなれぬる花の跡の夕暮

ちりぬれハいかにかはせん恨の跡も花の跡にも春の山かせ

権中納言公経

春ふかく霞たちぬる山の端にかゝりし雲も風のさそひのこる

百首歌よみ侍りし時

摂政太政大臣

初瀬山うつろふ花に春暮てまかひし雲そ峰にのこれる

藤原家隆朝臣

吉野川岸の山吹咲にけり峰の桜ハ散はてぬらん

皇太后宮大夫俊成

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井手の玉川

崇徳院御時百首歌よみ侍りけるに

権中納言国信

岩根こす清瀧川のはやけれは波折かくる岸の山吹

題しらす

厚見王

かはつなく神なひ川に影見えて今や咲らん山吹の花

延喜十三年亭子院歌合歌

藤原興風

あし曳乃山吹の花散にけり井手のかはつは今やなくらん

飛香舎にて藤花宴侍けるに

延喜御哥

かくてこそ見まくほしけれ万代をかけてにほへる藤浪の花

天暦四年三月十四日藤壺にわたらせ給て

花をしませ給けるに

天暦御哥

円ゐして見れともあかぬ藤浪のたゝまくをしきけふにもある哉

清慎公家屏風に

貫之

暮ぬとは思ふ物から藤の花さけるやとには春そひさしき

藤の松にかゝれるをよめる

緑なる松にかゝれる藤なれとおのかころとそ花は咲ける

春のくれつかた実方朝臣のもとにつかはしける

藤原道信朝臣

散のこる花もやあるとうちむれてみ山かくれを尋てしかな

修行し侍けるに春の暮によみける

大僧正行尊

木の本のすみかも今はあれぬへし春しくれなは誰かとひこん（こんイ）

五十首哥たてまつりし時

寂蓮法師

くれて行春乃湊ハしらねとも霞におつる宇治乃柴舟

山家三月盡といふ心をよみ侍けるに

藤原伊綱

こぬまても花ゆへ人乃またれつる春も暮ぬるみ山乃里

題しらす

皇太后宮大夫俊成女

磯乃神婦る乃わさ田をうちかへし恨かねたる春乃くれ哉

寛平御時后乃宮乃歌合の哥

よミ人志らす

まてといふにとまらぬ物としりなからしゐてそおしき春乃わかれハ

山家暮春といへる心を

宮内卿

柴乃戸をさすや日影乃名残なく春暮かゝる山乃端の雲

百首哥よミ侍ける時

摂政太政大臣

あすよりハ志賀乃花園まれにたに誰かハとはん春乃古郷

新古今和歌集巻第三

夏哥

題しらず　　持統天皇御哥

春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふあまのかく山

素性法師

をしめともとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣哉

更衣をよみ侍ける　　前大僧正慈圓

ちりはてゝ花のかけなき木のもとにたつことやすき夏衣哉

春を送りける又の日のつとめての事と

源道済

夏衣きていくかにか成ぬらんのこれる花はけふもちりつゝ

夏のはしめの歌とてよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成女

折ふしもうつれはかへつ世中の人の心の花そめの袖

卯花似月といふことをよませ給ける

白河院御哥

卯の花のむら〳〵さける垣ね○を雲まの月の影かとそみる

題しらず　　太宰大弐重家

卯の花のさきぬる時は白妙の波もてゆへるかきね○とそみる

新院よりめしける時よみて奉る

式子内親王

[illegible]ひと草はひのよるひる[illegible]の[illegible]色見[illegible]

わすれ草

小侍従

いつまでかはれ[illegible]神山[illegible]の[illegible]二葉[illegible]

最勝四天王院の障子にあさかの沼かきたる所

藤原雅経

[illegible]てつまこそあさかの沼に刈草のかつ見るまゝにしげる[illegible]

崇徳院に百首歌たてまつりける時よめる

待賢門院安芸

ちらぬわすれ桐の下草しげれどもわかれし[illegible]なくまて

題しらず

曽祢好忠

花散りし庭の木の葉も茂りあひて天照る月の影ぞまれなる

[illegible]根しのぶの絶[illegible]草葉[illegible]

藤原元真

夏草はしげりにけりな玉鉾の道行人もむすぶばかりに

延喜御歌

夏草はしげりにけれど郭公などわが宿に一声もせぬ

人麿

なくこゑをえやは忍ばぬ郭公初卯の花の影にかくれて

賀茂にまうでて侍りけるに人の郭公なかなんと
申けれはあけほのかたをかの梢おかしく
みえ侍けれは　　　　紫式部

郭公聲待ほとはかたをかのもりのしつくにたちやぬれまし

かもにまうてゝわすれぬけふの曉郭公のなきけれは

弁乳母

郭公み山出なる初こゑをいつれの宿のたれかきくらむ

題しらす　　　　よみ人しらす

五月山卯花月よ郭公きけともあかす又なかんかも

をのかつまこひつゝなくやさ月やみ神なひ山の山時鳥

中納言家持

郭公一こゑなきていぬる夜はいかてか人のいをやすくぬる

大中臣能宣朝臣

郭公鳴つゝ出るあしひきのやまとなてしこ咲にけらしな

大納言経信

二声ときくとはなしに郭公夜ふかくめをもさましつるかな

待客聞郭公といへる心を

白河院御製

郭公またうちとけぬ忍ひねはこぬ人を待我のみそきく

題しらす

花園左大臣

きてゝも粉れ猫られ然郷を忍し猿し氣もなかゐへ
神よもよめ郷云をこゝく

前中納言匡房

御花のこゝにねがふ猫く花をも見て乃こゝろ家に鳴也
入道前関白右大臣に侍ける時百首歌よませ
侍ける時よめる歌

皇太后宮大夫俊成

むかし男の草の庵のこゝろの中に渡り侍りて山がつともなん
ありける花橘に風のふきてやまぢにこそ人をもなかむ
題しらず

相模

ここそこに猫かれし地を何気中くみかや有りやはて一つ面

紫式部

維里をといひやうに郷にて由縁乃かたに有り侍りける
寛治八年前太政大臣高陽院歌合に
郷云と

周防内侍

寝をおさへ待ちいね出る時夜更けれども一つ思ひて
海邊の時なとゝ申しをよみ侍る

按察使公通

二条院まきのみかと郷云つけゐ侍りしに我まかる人に
百首歌よませ侍りし時よめる歌中れ

民部卿範光

わくらはに一聲にて思ひあかす老その杜の夜はのしるしと

郭公とこめる

八條院高倉

一聲はさえなりひそかにきゝぬ過るたそかれ時乃雲の絶まよひよ

千五百番歌合に

攝政太政大臣

ゆふかけのほのかにみえし月におなし山郭公まつ夜なるかに

後徳大寺左大臣家に十首哥よみ侍りけり

よみくはゝりしにある

皇太后宮大夫俊成

われのみや世をうしとても郭公てもまた五月乃かけはなるらん

時鳥乃心をよみ侍ける

前太政大臣

郭公まつくらき夜の山乃端に月出てまとひまちけるかな

權中納言親宗

わかれぬる月まてまくこぬよに出ぬれはこなた山端ら鳴わたる也

杜間郭公といふことを

藤原保季朝臣

こゑふかき杜の木の間をわかれ時鳥きこえぬ聲にぬれて袖に涙

題しらす

藤原家隆朝臣

いつくにかなかんこぬ夜をまくらの郭公ひまにほのきく一聲も哉

百首哥たてまつりしに　　式子内親王

こゑはしてくもちにむせふほとゝきすなみたやそゝくよひの村雨

千五百番哥合に　　権中納言公経

郭公なをひとこゑはおもひいてよおいその森の夜半の

むかしを　　西行法師

きかすともこゝをせにせん郭公山田の原の杉のむら立

郭公ふかき峰よりいてにけり外山のすそに声のおちくる

山家聴郭公といふことを

後徳大寺左大臣

をさゝふくしつのまろやのかりのとをあけかたに鳴郭公

又百首哥よませ侍りける時夏哥とて

よみ侍ける　　摂政太政大臣

うちしめりあやめそかほる郭公なくやさ月の雨の夕暮

述懐によせて百首哥よみ侍りける時

皇太后宮大夫俊成

昔おもふ草のいほりのよるの雨に涙なそへそ山郭公

五月五日ほとゝきすをきゝてよみ侍りける

大納言経信

わかなくよ鶯の花の色くさのこゑよりそわかふ声を聴

つほねならひにすみ侍けるころ五月六日
もろともになかめあかしてあしたになかき
ねをつゝみて紫式部につかはしける

上東門院小少将

なへて世のうきになかるゝあやめ草けふまてかゝるねはいかゝみる

紫式部

なにことゝあやめはわかてけふもなほ袂にあまるねこそたえせね

山畦早苗といふ事を

大納言経信

早苗とる山田のかけひもりにけり引しめ縄に露そこほるゝ

釋阿に九十賀給はせ侍し時屏風に五月雨

摂政太政大臣

を山田に引しめ縄のうちはへてくちやしぬらん五月雨の比

題しらす

伊勢大輔

いかはかりたこのもすそもそほつらん雲間もみえぬころの五月雨

大納言経信

みしま江の入江のまこも雨ふれはいとゝしほれてかる人もなし

前中納言匡房

五月雨はみつのみまきのまこも草かりほすひまもあらしとそおもふ

雨中木繁といふ事を

藤原基俊

玉かしはしけりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまて

百首歌よませ侍りけるに

入道前関白太政大臣

さみたれはおふの河原のまこも草からてや浪の下にくちなん

五月雨の心を

藤原定家朝臣

玉ほこの道ゆき人のことつても絶えてほとふる五月雨の空

荒木田氏良

五月雨の雲の絶まをなかめつゝ窓より西に月を待かな

百首哥たてまつりし時

前大納言忠良

あふちさくそともの木陰露おちて五月雨はるゝ風わたるなり

五十首哥たてまつりし時

藤原定家朝臣

さみたれの月はつれなきみ山よりひとりも出るほとゝきす哉

太神宮にたてまつりし夏哥の中に

太上天皇

郭公雲ゐのよそに過ぬなりはれぬ思ひのさみたれの比

建仁元年三月哥合に雨後郭公といふことを

二条院讃岐

五月雨の雲まの月の晴行をしばし待ける郭公かな

題しらず　　皇太后宮大夫俊成

誰か又花橘に思ひ出む我も昔の人となりなば

右衛門督通具

行末を誰忍べとて夕風に契りかおかむ宿のたちばな

百首歌たてまつりし時夏歌

式子内親王

かへりこぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕に匂ふたちばな

前大納言忠良

橘の花ちる軒の忍ぶ草むかしをかけて露ぞこぼるゝ

五十首歌たてまつりし時

前大僧正慈円

五月やみみじかき夜はのうたゝねに花橘の袖に涼しき

題しらず　　よみ人しらず

尋ぬべき人は軒はの古里にそれかとかほる庭の橘

郭公花橘の香をとめてなくは昔の人や恋しき

皇太后宮大夫俊成女

橘のにほふあたりのうたゝねは夢もむかしの袖の香ぞする

藤原家隆朝臣

今年より花さきそむる橘のいかで昔の香に匂ふらん

守覚法親王五十首哥よませ侍りける時
藤原定家朝臣
夕暮はいづれの雲のなごりとて花たちばなに風の吹らん
堀川院御時きさいの宮にて閏五月郭公と
いふこゝろをおのこどもつかうまつりけるに
権中納言国信
郭公さ月みな月わきかねてやすらふ声ぞ空にきこゆる
題しらず
白河院御哥
庭のおもは月もらぬまでなりにけり梢に夏の影しげりつゝ
恵慶法師
我宿のそともにたてるならの葉のしげみにすゞむ夏はきにけり
摂政太政大臣家百首哥合に鵜河をよみ侍り
ける
前大僧正慈円
鵜かひ舟あはれとぞみるもののふのやそうぢ川の夕やみの空
寂蓮法師
うかひ舟たかせさしこすほどなれやむすぼゝれ行かゞり火の影
千五百番哥合に
皇太后宮大夫俊成
大井河かゞりさしゆく鵜かひ舟いくせに夏の夜をあかすらん
藤原家隆朝臣
久かたのなかなる河のうかひ舟いかにちぎりてやみを待らん

百首哥よミ侍りし時

摂政太政大臣

いさり火の昔の光ほのみえてあしやの里にとふほたるかな

式子内親王

窓近き竹の葉すさふ風の音にいとゝみしかきうたゝねの夢

鳥羽にて竹風夜涼といふことを人々つかまつりしに

春宮権大夫公継

窓ちかきいさゝむら竹風吹は秋におとろく夏の夜の夢

五十首哥たてまつりし時

前大僧正慈圓

むすふ手に涼しき影よ岩井にてまた月のかけさへしられ

最勝四天王院の障子に清見関かきたる所

権大納言通光

清見方月はつれなき天の戸をまたてもしらむ浪の上哉

家百首哥合に

摂政太政大臣

かさねても涼しかりけり夏衣うすき袂にやとる月かけ

摂政太政大臣家にて詩歌を合せられけるに

水邊自秋涼といふ事をよみ侍る

有家朝臣

すゝしさは秋やかへりて初瀬川ふる川野への杉の

題しらす　西行法師

道のへに清水なかるゝ柳かけしはしとてこそたちとまりつれ

よられつる野もせの草のかけろひてすゝしくくもる夕立の空

崇徳院に百首歌めしける時　藤原清輔朝臣

おのつからすゝしくもあるか夏衣日もゆふくれの雨のなこりに

千五百番歌合に　権中納言公経

露すかる庭の玉さゝうちなひきひとむらすきぬ夕立の雲

雲隔遠望といふ事をよみ侍りける　源俊頼朝臣

十市には夕立すらしひさかたのあまのかく山くもかくれゆく

題しらす　従三位頼政

庭の面はまたかはかぬに夕立の空さりけなくすめる月かな

百首歌中に　式子内親王

夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたふく山にひくらしの声

千五百番歌合に　前大納言忠良

夕つく日さすやいほりの柴の戸にさひしくもあるかひくらしの声

百首歌めしける時　摂政太政大臣

秋ちかきけしきの杜になく蝉の涙の露や下葉そむらん

二條院讃岐

なく蝉の声も涼しき夕暮に秋をかけたる森の下露

かゆる乃花のほとりをみてよみ侍ける

壬生忠見

いつちとかよるは螢ののほるらん行かたしらぬ草の枕に

五十首哥たてまつりし時

摂政太政大臣

螢とふ野澤にしけるあしの根のよな〳〵下にかよふ秋風

刑部卿頼輔哥合し侍けるに納涼をよみ侍ける

俊恵法師

楸柯によゆうこ山家けに志風ひつ吹まちるゝ風と秋の夕くれ

瞿麦露滋といふ心を

高倉院御哥

志ら露乃玉もてゆへるませのうちに光さへそふとこなつの花

夕かほをよめる

前太政大臣

白露のなさけおきけることのはやほの〳〵みえし夕かほの花

百首哥よみ侍ける中に

式子内親王

たそかれのゝきはの荻にともすれはほにいてぬ秋そ下にこととふ

夏哥とて人々よみ侍けるに

前大僧正慈円

雲まよふ夕に秋をこめなから風もほに出ぬ荻のうへ哉

太神宮へたてまつりし夏のうたの中に

太上天皇

山里の峰のあま雲とたえして夕すゝしき槇の下露

文治六年女御入内屏風に

入道前関白太政大臣

岩井くむあたりのをさゝ玉こえてかつ〳〵結ふ秋の夕露

千五百番歌合に

宮内卿

片枝さす麻生の浦梨初秋になりもならすも風そ身にしむ

百首歌たてまつりし時

前大僧正慈円

夏衣かたへ涼しく成ぬなり夜やふけぬらんゆきあひの空

延喜御時月次屏風に

壬生忠岑

夏はつる扇と秋の白露といつれかまつはおかんとすらん

貫之

みそきする河の瀬みれは唐衣日もゆふくれに浪そたちける

新古今和歌集巻第四

秋哥上

題しらす　中納言家持

神なひのみむろの山の葛かつらうら吹かへす秋はきにけり

百首哥の中に秋のはしめの哥と　崇徳院御哥

いつしかと荻の葉むけのかたよりにそゝや秋とそ風もきこゆる

藤原季通朝臣

このねぬる夜のまに秋はきにけらしあさけの風のきのふにもにぬ

文治六年女御入内屏風に

後徳大寺左大臣

いつもきく麓の里と思へとも昨日にかはる山おろしの風

百首哥よみ侍ける中に　藤原家隆朝臣

昨日たにとはむと思ひし津の国の生田の杜に秋はきにけり

最勝四天王院障子にたかさこかきたる所　藤原秀能

吹風の色こそ見えね高砂の尾上の松に秋はきにけり

百首哥たてまつりし時　皇太后宮大夫俊成

ふしみ山松のかけより見わたせはあくる田面に秋風そふく

守覚法親王五十首哥よませ侍ける時

藤原家隆朝臣

明ぬるか衣手さむしすかはらや伏見の里の秋のはつ風

千五百番哥合に

摂政太政大臣

深草の露のよすかを契にて里をはかれす秋はきにけり

右衛門督通具

あはれ又いかにしのはん袖の露野原の風に秋はきにけり

源具親

しきたへの枕のうへにすきぬなり露をたつぬる秋のはつ風

顕昭法師

みつくきの岡のくす葉も色つきてけさうらかなし秋の初風

越前

秋はたゝ心よりをく夕露を袖のほかとも思ひけるかな

五十首哥たてまつりし時

藤原雅経

昨日まてよそにしのひし下荻の末葉の露に秋風そ吹

西行法師

をしなへて物を思はぬ人にさへ心をつくる秋のはつ風

あはれいかに草葉の露のこほるらん秋風たちぬ宮城野の原

崇徳院に百首歌めしくまゐりける時
皇太后宮大夫俊成

夏はつきぬる山田のひさへて又袖ぬらす秋はきにけり

中納言中将に侍けれ時家に山家早秋と
いへるこゝろをよませ侍けるに
法性寺入道前関白太政大臣

朝霧や立田の山の里ならて秋きにけりと誰かしらまし

題しらす
中務卿具平親王

ゆふくれは荻吹風のおとまさる今はたいかにねさめせられん

後徳大寺左大臣

夕されは荻の葉むけを吹風にことそともなく涙おちけり

崇徳院に百首歌めしくまゐりける時
皇太后宮大夫俊成

荻の葉も契ありてや秋風の音つれそむるつまとなるらん

題しらす
七條院権大夫

秋きぬと松吹風もしらせけりかならす荻のうは葉ならねと

影とさへわかぬあされの待宵に見えさりつるにき風の
のをわかれ秋らせとよめる
藤原經衡

見し里の音にもかはる夜されはさつけき風の松の音秋きぬと

百首うたに　式子内親王

うたゝねのあさけの袖にかはるなりならす扇の秋のはつ風

題しらす　相模

手もたゆくならす扇のおきところわするはかりに秋風そ吹

大貳三位

秋風は吹むすへとも白露のみたれておかぬ草のはそなき

曽祢好忠

あさほらけ荻のうは葉の露みれはやゝはたさむし秋の初風

小野小町

吹むすふ風はむかしの秋なからありしにも似ぬ袖の露かな

延喜の御時月次屏風に

紀貫之

おほそらを我もなかめてひこ星のつま待夜さへひとりかもねん

題しらす　山邊赤人

このゆふへふりくる雨はひこほしのとわたる船のかいのしつくか

宇治前関白太政大臣の家にて七夕の心をよみ侍りける

権大納言長家

年をへてすむへき宿の池水は星合の影もおもなれやせん

花山院御時七夕の哥つかうまつりけるに

藤原長能

袖ひちて我手にむすふ水の面にあまつ星合の空を見る哉

七月七日たなはたまつりする所にてよみ侍ける

祭主輔親

雲間より星合の空を見わたせはしつかにわたる天の河なみ

七夕哥とてよみ侍ける

太宰大弐高遠

織女のあまの羽衣うちかさねぬる夜涼しき秋風そ吹

小弁

たなはたの衣のつまは心して吹なかへしそ秋のはつかせ

皇太后宮大夫俊成

七夕のとわたる舟のかちの葉にいく秋かきつ露の玉章

百首哥中に

式子内親王

なかむれは衣手涼しひさかたの天の河原の秋の夕暮

家に百首哥よみ侍ける時

入道前関白太政大臣

いかはかり身にしみぬらん七夕のつま待よひのあまの河風

七夕の哥とて

権中納言公経

星合の夕すゝしき天河もみちの橋をわたる秋かせ

待賢門院堀河

たなはたのあふせたえせぬ天河いかなる秋かわたりそめけん

わくらはにあまの川波よるなからあくるそらにはまかせすもかな

女御徽子女王

いとゝしく思ひけぬへし七夕の別の袖にをける露

大中臣能宣朝臣

中納言兼輔家屏風に

紀貫之

織女は今やわかるゝあまの川川きりたちてち鳥なく かわ

堀河院御時百首歌中に萩をよみ侍ける

前中納言匡房

川水に鹿のしからみかけてけりうきてなかれぬ秋萩の花

題しらす

従三位頼政

かり衣われとはすらし露しけき野原の萩の花にまかせく

権僧正永縁

秋萩をおらてはすきし月草の花すり衣露にぬるとも

守覚法親王五十首歌よませ侍けるに

顕昭法師

萩の花ま袖にかけてたかまとのおのへの宮にひれふるや たれ

題しらす

祐子内親王家紀伊

をく露もしつ心なく秋風にみたれてさけるまのゝはきはら

人麿

秋萩のさきちる野への夕露にぬれつゝきませ夜は更ぬとも

中納言家持

さをしかの朝たつ野への秋萩に玉とみるまておける白露（イ小野）

凡河内躬恒

秋の野をわけゆく露にうつりつゝ我衣手は花の香そする

小野小町

誰をかもまつちの山の女郎花秋とちきれる人そあるらし

藤原元真

女郎花のへのふるさと思ひいてゝやとりし虫の声や恋しき

千五百番歌合に

左近中将良平

夕されは玉ちる野への女郎花枕さためぬ秋風そ吹く

蘭ともあり

公猷法師

ねからえて夜ぬれて袖にしら露は乱れて夕への野への秋風

崇徳院に百首哥めしける時

藤原清輔朝臣

うすきりの籬の花のあさしめり秋は夕とたれかいひけん

入道前関白太政大臣に侍ける時百首哥よませ侍るに

皇太后宮大夫俊成

いとかくや袖はしほれし野へに出て昔も秋の花はみしかと

籠居に侍る時秋野をみやりて侍るに

大納言経信

薄にとへやわかぬ野へのさゝてなるのかきわけ行かた野しらす

曽禰好忠

とよそてこむしと思ひ狩衣袖よりも露わきてかへる萩か原の花

貫之

山のはかさなりあひ行なかの袖の露ふるさとめかるそてわか通ひ

坂上是則

うちかへしわきさらの衣かるもやの袖くちぬと思ふころかな

人麿

さをしかの入野のすゝきはつお花いつしか妹か手枕にせむ

よみ人しらす

小倉山麓の野への花すゝきほのかに見ゆる秋の夕くれ

女蔵子親王

かれのみを風にまかせて花の露もしをれつゝ露をおくらむ

百首哥よ　式子内親王

むかし思ふ露のふる野にかくれ縁のことはりなき秋風さむき道

摂政太政大臣家百首歌よみ侍けるに

八條院六条

野邊遠みそての秋風をわけこえてひく露のうへ

和歌所哥合に朝草花といふ事を

あけぬとて野邊より山に入鹿の跡吹をくる萩の下風

左衛門督通光

題しらす

前大僧正慈圓

身にとまる思ひを荻のうは葉にてこのころかなし夕暮の空

崇徳院御時百首哥めしけるにおきて

大蔵卿行宗

身のほとを思ひつゝくる夕暮の荻のうは葉に風わたるなり

秋哥よみ侍ける

源重之女

秋はたゝものこそ思へ露かゝる荻のうへ吹風につけても

崇徳院に百首哥めしける時

藤原基俊

秋風のやゝはたさむく吹なへに荻のうは葉の音そかなしき

百首哥たてまつりし時

摂政太政大臣

荻の葉にふけは嵐の秋なるを待ける夜半のさをしかの聲

おしなへて思ひしことのかすかすに猶色まさる秋の夕暮

題しらす

暮かゝるむなしき空の秋を見ておほえすたまる袖の露かな

家に百首哥合し侍るに

物おもはてかゝる露やは袖にをくなかめてけりな秋の夕くれ

とのことし給とて人々にあまたよませ侍し
に山路秋といふ事を
前大僧正慈円
みやま路やいつより秋の色ならん見さりし雲の夕くれの空
題しらす
寂蓮法師
さひしさはその色としもなかりけりまきたつ山の秋の夕くれ
西行法師
心なき身にもあはれはしられけりしきたつ沢の秋の夕くれ
西行法師すゝめて百首哥よませ侍けるに
藤原定家朝臣
見わたせは花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕くれ
五十首哥奉りし時
藤原雅経
たえてやは思ひありともいかゝせんむくらの宿の秋の夕くれ
秋のうたとてよみ侍ける
宮内卿
思ふ事さしてそれとはなき物を秋の夕へを心にそとふ
鴨長明
秋風のいたりいたらぬ袖はあらしたゝ我からの露の夕くれ
西行法師

あはれにも秋そいつまてゆふくれの花にミたるゝ袖のうつろん

式子内親王

それなから昔にもあらぬ秋風にいとゝなかめをしつのをたまき

題しらす

藤原長能

日くらしのなく夕暮そうかりけるいつもつきせぬおもひなれとも

和泉式部

秋くれは常磐の山の松風もうつるはかりに身にそしみける

曽禰好忠

秋風はよそに吹くる音羽山なにの草木かのとけかるへき

相模

暁乃露は涙もとゝまらて恨る風乃声そのこれる　イきこゆる

法性寺入道前関白太政大臣家の歌合に

野風

藤原基俊

たかまとの野路の篠原すゑさはきそゝや木からしけふ吹ぬなり

千五百番歌合に

右衛門督通具

深草の里乃月影さひしさもすみこしまゝの野への秋風

五十首歌たてまつりし時杜間月といふことを

皇太后宮大夫俊成女

おほあらきの杜の木の間をもりかねて人たのめなる秋の夜の月

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに

藤原家隆朝臣

すゞの月まつ宿の袖の上に人をたのむるよひのいなつま

摂政太政大臣家百首歌合に

藤原有家朝臣

風わたる浅茅か末の露にたにやとりもはてぬよひのいなつま

[左]大将家にて十首哥よませ侍し時

右衛門督通光

武蔵野やゆけとも秋のはてそなきいかなる風の末に吹らん

百首哥たてまつりし時月のうたに

前大僧正慈圓

いつまてか涙くもらて月は見し秋まちえても秋そこひしき

式子内親王

なかめ侘ぬ秋よりほかの宿もかな野にも山にも月やすむらん

圓融院御哥

月影の初秋風と更ゆけは心つくしに物をこそおもへ

三條院御哥

足引の山のあなたにすむ人もまたてや秋の月をみるらん

雲間微月といふ事を

堀河院御哥

敷嶋やたかまと山の雲まより光さしそふ弓張の月

題しらす　　　　　　　堀河右大臣

今はとてねなまし物をしくれつる空とも見えすすめる月かな

橘為仲朝臣

あやなくもくもらぬ宵をいとふかなしのふの里の秋の夜の月

法性寺入道前関白太政大臣

風吹は玉ちる萩の下露にはかなくやとる野への月かな

従三位頼政

今宵たれすゝ吹風を身にしめて吉野のたけの月を見るらん

法性寺入道前関白太政大臣家に月の哥あまたよませ侍りけるに

太宰大弐重家

月みれは思ひそあへぬ山高みいつれの年の雪にかあるらん

和歌所にて哥合し侍りしに湖辺月といふことを

藤原家隆朝臣

鳰の海や月の光のうつろへは浪の花にも秋はみえけり

百首哥奉りし時秋の哥

前大僧正慈円

ふけゆかは烟もあらし塩かまのうらみなはてそ秋の夜の月

題しらす

皇太后宮大夫俊成女

ことはりの秋にはあへぬ涙かな月のかつらもかはるひかりに

前大納言隆房

さらに又暮をたのめと明にけり月はつれなき秋の夜の空

五十首歌たてまつりし時月前草花

摂政太政大臣

故郷乃本あらの小萩咲しよりよなよな庭の月そうつろふ

建仁元年三月歌合に山家秋月といふことを

よみ侍し

時しもあれ故郷人はおともせてみ山の月に秋風そ吹

八月十五夜和歌所歌合に深山月といふことを

深からぬ外山の庵の寝覚たにさそな木のまの月はさひしき

月前松風

寂蓮法師

月はなほもらぬ木の間も住吉の松をつくして秋風そ吹く

鴨長明

なかむれは千ゝに物思ふ月に又我身ひとつの嶺の松風

山月といふことをよみ侍ける

藤原秀能

葦引の山路の苔の露の上にねさめ夜深き月を見るかな

八月十五夜和歌所歌合に海辺秋月といふ事を

宮内卿

心ある雄島の海人の袂かな月やとれとはぬれぬものから

宜秋門院丹後
忘れしな難波の秋の夜はの空こと浦にすむ月はみるとも
鴨長明
松島やしほくむあまの秋の袖月は物思ふならひのみかは
題しらす　七条院大納言
こととはむ野島か崎のあま衣浪と月とにいかゝしほるゝ
和哥所歌合に海辺月と　藤原家隆朝臣
秋の夜の月やをしまのあまの原明方ちかき沖のつり舟
題しらす　前大僧正慈円
うき身にはなかむるかひもなかりけり心にくもる秋の夜の月
大江千里
いつくにか今宵の月のくもるへきをくらの山も名をやかふらん
源道済
ひとりわくらはなれ秋の夜はよかなる月と独なかめしは
上東門院小少将
かはらしな志るも志らぬも秋の夜の月待程の心はかりは
和泉式部
たのめたる人はなけれと秋の夜は月みてぬへき心ちこそせね
月をみくはつらしと人

藤原範永朝臣

広沢の池にそすめる秋の夜の月にいくよかならひそめ覧

題しらす　相模

身にそへるかけとこそみれ秋の月袖にうつらぬおりしなけれは

永承四年内裏歌合に　大納言経信

月影のすみわたるかな天の原雲吹はらふ夜はのあらしに

題しらす　右衛門督通光

立田山夜はにあらしの松吹は雲にはうとき峰の月影

崇徳院に百首歌たてまつりける時　左京大夫顕輔

秋風にたなひく雲のたえまよりもれいつる月のかけのさやけさ

題しらす　道因法師

山のはに雲のよこきるよひのまはいてゝも月そ猶またれける

殷富門院大輔

なかめつゝ思ふもまねくなれといかにいく世をそへこし秋の夜の月

式子内親王

よひのまにさてもねぬへき月ならは山の端ちかき物はおもはし

ふくるまてなかむれはこそかなしけれ思ひもいれし秋のよの月

五十首歌たてまつりし時

摂政太政大臣

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月をみるかな

家に月五十首歌よませ侍りける時

月だにもなぐさめがたき秋の夜の心もしらぬ松の風かな

藤原家隆朝臣

さむしろや待つ夜の秋の風ふけて月をかたしく宇治の橋姫

題しらず

右大将忠経

秋の夜のながきかひこそなかりけれ待つにふけぬる有明の月

五十首歌たてまつりしに野径月

摂政太政大臣

行末は空もひとつの武蔵野に草の原よりいづる月かげ

雨後月

宮内卿

月をなほ待つらむものか村雨の晴れゆく雲の末の里人

題しらず

右衛門督通具

秋の夜はやどかる月も露ながら袖に吹きこす荻の上かぜ

源家長

秋の月しのにやどかる影たけて小笹が原に露ふけにけり

元久元年八月十五夜和歌所にて田家見月といふことを

前太政大臣

風わたる山田の庵をもる月や穂波にむすぶ氷なるらし

和哥所哥合に田家月を

前大僧正慈圓

雁のくる伏見の小田に夢さめて寝ぬ夜の庵に月をみるかな

皇太后宮大夫俊成女

稲葉吹く風にまかせて住む庵は月そまことにもりあかしける

題しらす

あくかれて寝ぬ夜の塵のつもるまて月にはらはぬ床のさむしろ

大中臣定雅

秋の田のかり穂の床のいな莚月やとれともしける露かな

崇徳院に百首哥めしける時

左京大夫顕輔

秋の田に庵さす賤の苫をあらみ月とともにやもりあかすらん

百首哥たてまつりし秋哥に

式子内親王

秋の色は籬にうとくなりゆけと手枕なるゝ閨の月影

秋哥の中に

太上天皇

秋の露や袂にいたく結ふらん長き夜あかすやとる月かな

千五百番哥合に

右衛門督通光

さらに又暮をたのめと明にけり月はつれなき秋の夜の空

経房卿家哥合に暁月の心をよめる

二條院讃岐

おほかたに秋の寢覺の露けくはまた誰か袖にありあけの月

五十首哥たてまつりし時

藤原雅經

拂ひかねさこそは露のしけからめやとるか月の袖のせはきに

新古今和歌集巻第五

秋哥下

和哥所にておのこともうたよみ侍りしに夕の鹿といふことを

藤原家隆朝臣

下紅葉かつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のなくらん

百首哥たてまつりし時

入道左大臣

山颪に鹿の音たかくきこゆなり尾上の月にさ夜やふけぬる

寂蓮法師

野分せし小野の草ふしあれはてゝみ山にふかきさを鹿のこゑ

題しらす　　　　　　　　後恵法師

嵐ふくまくすか原になく鹿ハ恨てのミやつまを恋らん

　　　　　　　　　　　前中納言匡房

妻こふる鹿のたちとを尋ぬれハさ山かすそに秋風そ吹

百首哥奉りし時秋乃哥

　　　　　　　　　　　惟明親王

み山邊の松の末を渡るなり嵐にやとすさをしかの声

晩聞鹿といふ事をよみ侍し

　　　　　　　　　　　土御門内大臣

夕暮ハいつもなかめぬ物なれとやまさとらん鹿なく山風秋の夕くれ

百首歌よみ侍けるに

　　　　　　　　　　　摂政太政大臣

たくへくる松の嵐やたゆむらん尾上にかへるさを鹿の声

千五百番哥合に

　　　　　　　　　　　前大僧正慈円

なく鹿の声にめさめてしのふかな見はてぬ夢の秋の思ひを

家に哥合し侍りけるに鹿をよめる

　　　　　　　　　　　権中納言俊忠

夜もすから妻とふ鹿のなくなへに小萩か原の露そこほるゝ

題しらす

　　　　　　　　　　　源道済

寝覚して久しく成ぬ秋の夜ハ明やしぬらん鹿そなくなる

西行法師

を山田の庵ちかく鳴鹿の音におとろかされておとろかす哉

白河院鳥羽におはしましけるに田家秋興と
いふことを人々よみ侍りけるに

中宮大夫師忠

山里のいなはの風に寝覚してよ深く鹿乃聲をきく哉

郁芳門院乃前栽合によみ侍りける

藤原顕綱朝臣

独ねやいとゝさひしきさを鹿の朝ふす小野の葛のうら風

題しらす

俊恵法師

龍田山木すゑまはらに成まゝにふかくも鹿のそよくなるかな

祐子内親王家哥合の後鹿の哥よみ侍り
けるに

権大納言長家

すきて行秋乃形見にさをしかのをのか鳴音も惜くやあるらん

摂政太政大臣家の百首哥合に

前大僧正慈円

わきてなと庵もる袖のしほるらん稲葉にかきる秋の風かは

題しらす

よみ人しらす

秋田もるかりほつくりわかをれは衣手さむし露そおきける

前中納言匡房

秋の風わきけに風のてときしる山田にひたを吹せてそきく

善滋為政朝臣

時鳥なく五月雨にうへし田を鴈かねさむみ秋そ暮ぬる

中納言家持

今よりは秋風さむく吹なんをいかてかひとりなかき夜をねん

人麿

秋されは鴈の羽風に霜ふりてさむき夜な〱時雨さへふる

さをしかの妻とふ山の岡辺なるわさ田はからし霜はおくとも

貫之

かりてほす山田のいねは袖ひちてうへしさなへとみえすもあるかな

菅贈太政大臣

草葉には玉とみえつゝわひ人の袖の涙の秋のしら露

中納言家持

我宿のをはなかすゑにしら露のおきし日よりそ秋風もふく

恵慶法師

秋といへは契りおきてやむすふらんあさちか原のけさの白露

人麿

秋されはおく白露に我宿のあさちかうは葉色つきにけり

天暦御哥

おほつかな野にも山にも白露のなにことをかは思ひおくらん

後冷泉院みこの宮と申ける時尋野花と云
ふこゝろを
堀川右大臣
露しけみ野へをわけつゝから衣ぬれてそかへる花のしつくに

閑庭露滋といふことを
藤原基俊
庭の面にしけるよもきにことよせて心のまゝにおける露かな

白河院にて野草露繁といふ心をよみ侍し
贈左大臣長実
秋の野の草葉おしなみおく露にぬれてや人のたつねゆくらん

百首哥よみてたてまつりし時
寂蓮法師
物思ふ袖より露やならひけん秋風吹けはたえぬものとは

秋乃哥中に
太上天皇
露は袖に物思ふころはさそなおくかならす秋のならひならねと
野原より露のゆかりを尋きて我衣手に秋風そ吹

題しらす
西行法師
きりきりす夜寒に秋のなるまゝによはるか声の遠さかりゆく

守覚法親王家五十首哥中に
藤原家隆朝臣
虫の音もなかき夜あかぬふるさとに猶思ひそふ松風そ吹

百首歌の中に　式子内親王

跡もなき庭の浅茅にむすぼほれ露の底なる松虫の声

題しらず　藤原輔尹朝臣

秋風に声よはり行すゞ虫のつゐにはいかゞならんとすらん

前大僧正慈圓

衣うつ音は枕にすがはらやふしみの夢をいく夜のこしつ

千五百番歌合に秋歌

権中納言公経

衣うつみ山の庵のしばしばもしらぬ夢路にむすぶ手枕

和歌所歌合に月のもとに衣うつ声をきくとい
ふことを

摂政太政大臣

里はあれて月やあらぬと恨ても誰浅ぢふに衣うつらん

宮内卿

まどろまでながめよとてのすさびかな麻のさ衣月にうつ声

千五百番歌合に

藤原定家朝臣

秋とだにわすれんと思ふ月影をさもあやにくにうつ衣かな

擣衣の心を

大納言経信

ふるさとに衣うつとは行雁や旅のそらにもなきて告らん

中納言兼輔家屏風歌

貫之

鴈なきてふく風さむしから衣君待かてにうたぬ夜そなき

摂政家の哥合に

藤原雅経

みよし野の山乃秋風さよ更てふるさと寒く衣うつなり

式子内親王

千度うつ砧乃音に夢さめて物思ふ袖の露そくたくる

百首哥よませ給ひし時

ふけにけり山のはちかく月さえてとをちの里に衣うつ声

九月十三夜月くまなく侍りしを詠わたし[illegible]

よみ計る

道信朝臣

秋ふかき夜ふけにけるこの月みまて袖もあこう露そ[illegible]

百首哥よませ給ひし時

藤原定家朝臣

独ぬる山鳥の尾のしたり尾に霜おきまよふ床の月かけ

摂政太政大臣家にて月前五十首よ
ませ侍りけるに

寂蓮法師

ひとめみし野邊の気色ハうら枯て露のよすかに宿る月かけ

月哥とてよみ侍りける

大納言経信

秋乃夜は衣さむしろかさねても月乃光にしく物そなき

九月はかりに

花山院御哥

秋の夜は早長月になりにけりことわりなりや寝覚せらるゝ

五十首哥たてまつりし時

寂蓮法師

むら雨の露もまだひぬ槙の葉に霧たちのぼる秋の夕ぐれ

秋のうたとて

太上天皇

さびしさはみ山の秋の朝ぐもり霧にしほるゝ槙の下露

河霧といふことを

左衛門督通光

あけぬるや川せの浪のたえ〴〵にをちかた人の袖の見ゆるは

堀川院の御時百首うたてまつりけるに霧をよめる

権大納言公実

麓をば宇治の川霧たちこめて雲井にみゆる朝日山かな

題しらず

曽祢好忠

山里にきりの籬のへだてずはをちかた人の袖もみてまし

清原深養父

なく雁の音をのみぞきく小倉山霧たちはるゝ時しなければ

人麿

かきほなる荻の葉そよぎ秋風の吹なるなべに雁ぞ鳴なる

秋風に山とびこゆる雁がねのいや遠ざかり雲がくれつゝ

凡河内躬恒

初雁の羽風すゞしくなるなべにたれか旅ねの衣かへさぬ

よみ人しらず

鴈かねは風にきほひてすくれともわかまつ人のことつてもなし

西行法師

よこ雲の風にわかるゝしのゝめに山とひこゆる初かりのこゑ

白雲をつはさにかけてゆく雁の門田のおものともしたふなる

五十首哥たてまつりし時月前聞鴈といふこと

前大僧正慈円

大江山かたふく月のかけさえてとは田のおもにおつる鴈かね

題しらず

俊恵法師

むら雲や鴈の羽風に晴ぬらん声きく空にすめる月かけ

皇太后宮大夫俊成女

吹まよふ雲井をわたる初鴈のつはさにならすよもの秋風

藤原家隆朝臣

秋風の袖に吹まく峯の雲をつはさにかけて鴈もなくなり

五十首哥たてまつりし時菊籬月といふことを

宮内卿

霜をまつ籬の菊のよひのまにをきまよふ色は山のはの月

朱雀院御時内裏より菊をめしけるにたて

まつるとてむすひつけ侍ける

花園左大臣室

九重にうつろひぬとも菊の花もとの籬を思ひわするな

権中納言定頼

今よりはまた咲く花もなき物をいたくなをきそ菊のうへの露

この殘りも野邊にはさわくなりと

中務卿具平親王

秋風の声よはりゆく野辺の花もわきも雲の色にさへかれよはるなる

題しらず

大江嘉言

寝さめする袖さへさむく秋の夜の嵐ふくなり松虫の声

千五百番歌合に

前大僧正慈圓

秋を經てあはれも露もふか草の里とふ物は鶉なりけり

左衛門督通光

いり日さす麓の尾花うちなびきたが秋風にうづらなくらむ

題しらず

皇太后宮大夫俊成女

あだにちる露の枕にふしわびてうづらなくなりとこの山風

千五百番歌合に

とふ人もあらし吹きそふ秋はきて木の葉にうづむ宿の道芝

色かはる露をば袖におきまよひうらがれてゆく野辺の秋かな

秋歌とて

太上天皇

秋ふけぬなけや霜夜のきり〴〵すやゝかげさむしよもぎふの月

百首哥よミてまつりし時

摂政太政大臣

きり〳〵すなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん

千五百番哥合に　　春宮権大夫公継

寝覚する長月の夜の床さむみけさ吹風に霜やおくらん

和歌所にて六首哥よミてまつりし時秋哥

秋ふかき淡路乃嶋の有明にかたふく月を送る浦風

前大僧正慈圓

暮秋の心を

長月もいく有明に成ぬらんあさちの月のいとゝさひゆく

摂政太政大臣大将に侍りし時百首哥よませ侍けるに

寂蓮法師

かさゝきの雲のかけはし秋暮て夜半には霜やさえ渡らん

さくらのもみちしはしめたるをみて

中務卿具平親王

いつのまに紅葉しぬらん山桜昨日か花のちるを惜し

紅葉透霧といふことを

高倉院御哥

うす霧のたちまふ山のもみちはゝさやかならねとそれとみえけり

秋哥とてよみ侍る

八條院高倉

神なびのみむろの梢いかならんなべての山もしぐれする比

最勝四天王院の障子にすゞか川かきたる所

太上天皇

すゞか川ふかき木の葉に日かずへて山田の原の時雨をぞきく

入道前関白太政大臣家に百首哥よみ侍りける
にもみぢを

皇太后宮大夫俊成

心とやもみぢはすらん立田山松はしぐれにぬれぬ物かは

大井川にまかりて紅葉見侍りけるに

藤原輔尹朝臣

思ふ事なくてぞみまし紅葉ばを嵐の山のふもとならずは

題しらず

曾禰好忠

入日さすさほの山のはゝそ原くもらぬ雨と木葉ふりしく

百首哥たてまつりし時

宮内卿

立田山あらしや峰によはるらんわたらぬ水もにしきたえけり

左大将に侍りける時家に百首哥合し侍りけるに
はゝそをよみ侍りける

摂政太政大臣

柞原しづくも色やかはるらん杜の下草秋ふけにけり

藤原家隆朝臣

時わかぬ浪さへ色にいづみ川はゝその杜に嵐ふくらし

清滝乃瀬よあれねる宿よこそみたれ散かたの水もと
らぬらむ
源俊頼朝臣
故郷ハちる紅葉葉にうつもれて軒の忍ふに秋風ぞ吹く
百首哥たてまつりし秋うた
式子内親王
桐乃葉も踏分かたく成にけり必人をまつとなけれと
題しらず
曽祢好忠
人ハ来す風よ木の葉ハ散はてゝよな〳〵虫ハ声よはるなり
守覚法親王五十首哥よミ侍りける
春宮権大夫公継
紅葉葉乃色にまかせて常盤木も風にうつろふ秋の山かな
千五百番哥合よ
藤原家隆朝臣
露時雨もる山陰乃下紅葉ぬるとも折らん秋乃かたミよ
題しらず
西行法師
松にはふまさきのかつら散にけり外山乃秋ハ風すさふらん
法性寺入道前関白太政大臣家哥合よ
前参議親隆
鶉なくかた野にたてるはし紅葉ちりぬはかりに秋風そ吹く
百首哥奉りし時
二条院讃岐

落てはる紅葉の色は惜けれと猶ふかき山の人の来
跡しらせそ　柿本人麿

龍田河紅葉をかためつきぬ山の林風にちりそまかへる
權中納言長方

わたつみの波よりなれし紅葉やは山風木のはの風
長月のころみかせに白こころ侍りけるにわかれ
山をみちなみちたなつきし中川らしくる
今そわかれて　權中納言公經

紅葉をはとはしる嵐のこゝろかは山にしもはなちかわ
家に百首歌合し侍るとき

攝政太政大臣
あすこん今日もくるゝの林風に河瀬をとつゝむ衣の袖かな
千五百番歌合に　權中納言兼宗
竹林に秋のかたみとや紅葉をもとめて河瀬を染やらん
紅葉見にまかりてよみ侍りける
前大納言公經
ちらぬまてちる紅葉をも錦にて山路わけゆく秋の錦を
津の国に侍りける頃道済か許に遣はしける
能因法師
夏草のかりそめにとてきつれとも難波の浦に秋そ暮ぬる

くれの秋思ふ事侍りける頃
かくしつゝ暮ぬる秋と老ぬれとしかすかに猶物そ悲しき
五十首哥よませ侍りける時
守覚法親王
身にかへていさゝは秋をおしみ見むさらてももろき露の命を
閏九月盡の心を　前太政大臣
なへて世の惜さにそへてをしむ哉秋より後の秋のかきりを

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan